こしかやの光

歎德の卷

如来光明歎德章……一
念佛三昧を宗とす……二四
三昧正受……二六
三昧入神の心相七覚支……二七
三昧證德……三二
三昧功果実質……三五
念佛三昧三縁……三九

如來光明歎德章

如來とは即一心自性の中より來る故。又、如は不變不異にして自性を失せず故に如と爲す。來とは即眞如自性を守らず緣に隨つて顯現す。故に名て來と爲す。此乃不來の來也　已上。佛權智の水菩薩實智の頂に灌く時は阿彌陀佛も己心自性の性海一味の外には無し。無師獨悟にして諸佛所師所以法也と云如く己心實相の性海如來を師とする計也。

光明とは心性寂にして常に照す故に光明と云ふ。光は靜にして絶對理性的精神態にして超空間、寂にして常照せる自然的形式の智慧なり。即ち無智の智、自然智也。明は動にして絶對理性的精神態徧空間一切衆生の精神と關係の中に實現して活動せる超精神態なり。十方一切賢聖の精神作用是なり。經曰諸佛正徧智入一切心想中。

此の光は壽にして絶對眞理精神態にして、超時間常恒永遠寂靜泪然たる絶對理性永

劫常然たる神靈態なり。衆生の方より之に對すれば、超時間的形式三世同念の觀念なり。

明は命にして絶對理性の精神態生命にして、徧時間永遠に活動して念々休息することなき作用にして、一切諸佛賢聖の精神作用は悉く無量壽の活動せるに外ならず。

要するに光明とは絶對理性の大精神態にして、すべての過失を除きたる純粹至精なる精神態、此精神に自爾の法然として虛徹靈明し、空間に徧し時間に徹照すべき功能を有せる精神態にして、此の絶對理性の虛徹靈明なる精神態の時間性には壽命となり空間的には光明となりて顯はるゝも同體異容のみ。又光は全智にして明は全能なり。歎德章とはそのいさをしをほめたゝへをあらはす形容なり。

佛とは梵語即ち佛陀こゝに譯して覺者といふ。是に三義あり、一に自覺、二に覺他三に覺行圓滿なり。自覺とは自ら最圓滿に開覺せる義なり、何をか覺るべき、即ち覺りとは要をとりて云はゞ即ち最高等の宗教的客體の阿彌陀佛の體用を圓滿に覺悟せしなり。覺悟と云はゞ宗教知力にのみ關する如く聞ゆれども、其實知力的に心情的に解脱融合し意志には神靈同化として最完全に最圓滿に成就したるを自覺と名づく。覺他とは自己が神靈同化の結果としてみだの實現に活動し、宇宙解脱の目的を以て一切を攝取同化するの實行々動を云ふ。覺行圓滿とは自己の如くに衆生を悉く彌陀の勢力によつて、神靈同化せしむるところのすべての機關成就し、この勢力を以て宇宙解脱の目的として、將來に於て此の意志流行し一切を同化したるを覺行圓滿と云ふ。

佛と法との區別。佛とは宗教の客體にして、主體がその意識より見れば一切の萬物の根底にして中心たり終局目的なり。客體なる佛陀即ち神を離れては萬物の根底あるなし。故に客體の彌陀は法界一切の根底としては法身にして世界萬物の根底として、其の本體は絶對精神態にして徧一切空間徧時間にして、此より生せざるなく之に攝せざるなき法身の體なり。世界一切を攝取の光としては一切に終局目的を與へんが爲め一切慧となりて、萬物を信仰の條件内に攝取し靈化する性能を有せる客體にして、佛

陀は本質精神態活潑的の絶對精神の最上無上の人格なり。人格と云ふも個人的人格にあらず、一切の個人々格を包括する圓滿なる無限なる人格なり。個人に準じて人格といふも超人格なり。三身或は十身等を統一せる體也。佛も法も共の實體に於ては異なるにあらず。精神態なるが故に人にして佛といふべし。然るに法とは理法、即ち法身が本體より個人及び個體的世界を產出し、又世界より全體に攝化すべき契機を有せる解脫をあたへ終局目的に歸入すべき契機あり。佛陀の絶對精神が實に衆生を解脫し靈化すべき妙法のあるあり。此の契機を法といふ。法即ち佛の性能にして佛が一切に對する處の契機を法といふ。佛の法身の能力を離れて法體あるなし。法體即契機を離れて佛の法身を求むべからず。佛の本質性能が世界の衆生を解脫し靈化する契機について法と名づく。客體の佛の性能を法と名づくべきものにして、佛教哲學は法身を多くは法寶に屬す。應用宗教にては法身を客體なる活潑なる佛陀の本質性能にして、客體と主體との關係に就ての契機を離れての法の體あるなし。

牟尼佛陀は是れ宗教的關係には主體なるや、はた客體なるやの疑問に就ては、外面より見るときは最高等なる宗教的心機の開覺者にして、人身を以て靈格の彌陀を表彰すべき生活々動し、彌陀の實在を實現したる先覺者なり。內面より云はゞ客體なる彌陀と心機的致一し解脫し神靈同化したる大精神なり。是れ衆生の爲めに主體と客體との調和者なり。內面より云はゞ釋迦即ち阿彌陀佛なり。故に小經には我今阿彌陀佛の不可思議功德と說き玉へるを、藕益師解して、是諸佛釋迦皆阿彌を以て自と爲とはこの意なり。又法華には我本來無量壽なることを說き給へり。是れ圓滿一乘の修多羅の牟尼の內面即阿彌陀にして、阿彌陀は絶對的統一の神靈にして、釋迦及び諸佛は是れ個體のミダなることを知るべし。

阿難尊者——

無量壽如來。無量壽者、玄記に曰く、即ち是れ別號にして顯佛所具の功德を召す故に法に配屬す。覺とは智者是れ能く覺了するが故に人に屬す也。無量壽とは是法。問。

無量壽は別名、覺は通號なり、通別異なれども人名なり。何ぞ是れ法と云ふ乎。答。俱に佛號なれども無量壽は所具德故に法と云ふ。覺は能具の覺の故に人と云ふ。鈔十五七丁無量壽覺は俱に佛號なれども、無量壽は是れ所具の德なれば之を法と云ふ。覺は能具の覺なれば之を人と曰ふ。然れば即ち能具所具、能覺所入の法顯然也々々。(師御一義通て)之を言はゞ、無量壽は不生不滅凝然常住實相の法也。彼の實相常住如天甘露不死の藥と云ふが如し。今私に云ふ、此の御義若し他宗の無量壽ならば深秘門の意なり。何ぞ今又校ん。若し爾らは料簡無要歟々々。然則萬物體あり、之を法といふ。萬物の名是也。今の無量壽は是れ物の體也。故に名けて法と爲す。法體別無し全く無量壽也。無量壽を持を無量壽覺と名く。言ふ心は無量壽を持の覺者也。故に人法と云ふ。曾て實相般若に懸る可からず歟。

無量壽佛とは梵語に阿彌陀、即ち三位即一體の總稱なり。無量壽佛、威神と光明を體相用の三大に配せば、無量壽佛は體德、最尊の威德廣大にして盡十方法身實在せざる處なく亦施作せざる所なし。

最尊は威德絶對にして匹敵するもの有ることなし。何となれば若し絶對に非ずして他に匹敵あらば、共威德に限彊ある故に絶對なる主尊ならざればなり。

最尊は粹然至純にして、質の混雜あることなし。衆生の惡素質あるが如くに非ず。至純の性德を顯はさんが爲に選擇本願を示されたり。

至尊は不易にして常に同一なり。凡そ萬物一として變化して常住なるものあることなし。共所以は未だ圓滿なる極度に達せざる爲なり。至尊は圓滿充足して缺る所なき故に變易なし。至尊は無限にして一切處に實在し又光被せざるなし。遍空間の故に一時に一切處に妙用を施さゞるなし。斯の如く絶對至純の無限にして空間に遍在し、常に同然不易にして、時間に遍在する神靈態を無量壽と號し上る。

威神とは相大、共の相神靈態にして至尊の無上の智慧、無上の慈悲、神靈態とは共質絶對の理性にして大智慧光明普ねく法界に遍照せる義なり。

此の神靈態と正義と恩寵とは、至尊の妙用にして、法身智相にして法界に周徧せる無碍智態なれば、之色相なし即ち實相なり。實相は無相なれども、無相は相として相ならざるなし。至尊は衆生の爲に塵沙の妙色相好を顯現し、其の德たる玄妙不可思議無上の智慧、無上の恩寵、無限の威力を有し、法界一切の萬有は悉く至尊の大圓鏡裏に炳現し、無限の慈悲を以て哀愍攝護したまひ、至尊は安樂常住自在清淨の德あり。正義は威神の光明即ち勢能の智慧あり。之を信仰して此に致一するものは自ら正義ならしむる性あり。

神靈態とは勢能の智慧にして、之に對するものをして神靈同化し、すべての惡性を脱し、至眞にして侵すべからざるの德に靈化す。

恩寵とは唯嚴蕭のみにあらず、無上の慈悲を以て既に罪惡に亡びたる精神をして恩寵に感謝して、自ら回復せしむるの恩寵なり。

光明は其體は神聖體至純にして眞理なり。是れ一切智慧の相なり。また無上の慈悲ありて萬類を哀愍攝護する德なり。光明も其質は神聖態、正義と恩寵威力等の所有る靈德を包含せる精神態にして、全空間に遍在せる不可思議の光なり。即ち無上の智慧と無上の慈悲の心靈體なり。

かく無上の智慧と慈悲との神聖、正義、恩寵の精神が一切處に充滿して、信ずる衆生の精神をして神聖同化せしむる妙用あり。光明の用は人の惡素質を脱却して自性の如くに靈化するにあり。

最尊第一とは、同位中の異階級にあらずして、彌陀は三位を稱するうち今は第一と第二位にあり。諸佛とは第三位にあたるを以て也。

諸佛とは其の名字不可說ならん。要解に「佛に無量の性あり、無量の名あるべし。機に隨つて立つ。或は因を取り或は果を取り、或は性、或は相、或は行願等一隅を擧ぐといへども仍四悉を具す。一々の名に隨つて取詮の德を顯はす。劫壽之を說くとも悉すこと能はず」。實を剋して論ずれば、十方無量諸佛の名字即ち彌陀の德を表顯す。

彌陀の德、無量なる故に無量の世界に無量の身を表はし、無量の名を顯はして其の功用を顯はす。故に小經に廣長の舌相を出して誠實を證するのみに非ず。諸佛三業四威儀悉く彌陀の實在を現して證明するなり。無量の身無量の名も悉く阿彌陀即ち無量の義を顯はすが爲なり。

今暫く二三の名を以て其の德を詮表せば、阿閦、此には不動と云ふ、佛法身不生不滅、無去無來、湛然常住、如々不動なるが故に。須彌相とは佛の相好妙高にして能く及ぶものなきが故に。大須彌とは佛德廣高にして大須彌の如の故に。須彌とは印度に於て古代より八萬由旬の四寶合成の山ありとの、表示的衆生の意識に想像せるが故に便宜上譬說に用ひたるなり。

至尊と諸佛との本來の關係。至尊は絶對獨一の神尊にして他に匹敵すべき神あるなし。これ至尊は十方一切諸聖を統攝する本佛なればなり。至尊一切衆理の歸する處、之を離れて終局目的あることなければなり。

第一とは第一義にして二義なきの謂なり。至尊は絶對的第一義にして、統一的本佛一切諸佛を分化し、一切萬類を攝護する尊位也。

諸佛とは、至尊の分身にして、十方のすべての世界に應化し、人類に應身を以て八相成佛の化儀を以て、人格を以て至尊の聖德を示し、救世主として救靈の道を宣傳する聖者にして此土の牟尼世尊の類是なり。一佛土毎に一化身を出して、福音を宣べて人類を度す、之を諸佛とす。

諸佛本ミタ至尊の分身なれば、之を末と名づけ、統一せる本體を本と名づけ、末を攝して本に歸すれば、諸佛即ち彌陀なり。一月天に在て影萬水に現す。之を一體不二の本末の非一の義なり。

其れ衆生ありて。先づ人を分て三類となす。不定聚、邪定聚、正定聚。

一、不定聚とは天然的精神未だ光明に遇はざるものなり。人は本悉く自性清淨なる性能を具有す。譬へば粳米の糠糟の皮殼ある如く、金の鑛坑の中に在るが如く、善惡

の種子俱に有り。若し善緣に遇はば佛性開展し、神聖的精神となり、惡の刺激によれば惡性能發展して、黑暗態生活に入る。天然は根本幸福主義のみの劣態にして本能に盲從し、純朴にして未だ主義開展せざるを、何れにもなるべきものなれば不定聚と名く。

二、邪定聚とは光明に背けるもの、之を黑暗態生活と爲す。即ち邪惡の人。其本は天然規律の幸福主義より出て、本能に盲從し、主我主義即ち我慾を逞うし、己に利ある限りを利用し、其根本惡の煩惱より出で、ます〳〵惡を牢固にし、自ら許して是とし敢て改ることを用とせず。是高度の目的より言へば、脱却すべき性能を除かざるのみならず、却つて之を增長し肉慾我慾を恣にし、內心邪にして外身口に惡をなして、良心を醒覺する彌陀の光に背き、黑暗の中に主我を主張し、根本惡の上に惡習慣、病態惡症となり、つゐに治すべからざるもの惡性格に至る。之を邪定聚、即ち黑暗生活とす。たとへ三惡道に落つべき邪惡に非ざるも、更に信仰なく主我を執して解けざるものも之に屬す。

三、正定聚。光明に遭ふもの、光明態生活と名づく。天然具有せる無明及び罪惡の皮殼を破し、主我を脱し、すべて脱却すべき素質を脱し、解脱靈化の精神として淸淨自性顯はれ、完全なる道德的生活となる。經に「此の光りに遇ふものは三垢消滅し歡喜踴躍して善心生ず」と是なり。此光によりて知情意の三能に於て垢汚を脱却し、知力には、不正知、不眞理知を滅して、眞理を覺るべき正知見を開き、心情には、不靈福態の煩惱を脱し靈福に充され、意志には世俗情操、主我執着の垢を去りて聖靈菩提心となる。斯の如きの精神態は、決定して無上覺に至る故に、正定聚と名づく。

斯光。光に古來色心の二種を說けども、今は宗敎心要上直接なる精神態光。

光の性能、性に三態、神靈態、正義、恩寵。

この光りの本質は、彌陀一切智と一切能との勢能にして、普ねく法界に周遍して實在せざる處なく、體即用にして體は智慧にして勢能を用とす。即ち勢能を光明の用と

す。勢能の智慧を光明の體とす。

光を性質に就て三種に分つ。神靈態、正義、恩寵の三性なり。神靈態とは其勢能の智慧なり。神の神靈態は絕對理性にて、神聖圓滿なる道德態の光明にして、此の光に合ふものを自ら神聖なる道德的行爲をなさしむ。此の光能く衆生を自律的ならしむ。此の彌陀の至精至純なる絕對的理性の光にあへば、自己の良心即ち理性を醒覺して道德秩序を發見せしめ、神聖なる彌陀の聲を認識するが故に、道德の根底は皆彌陀の光なるを見る。彌陀の神聖なる光に合ふ時は、自ら侵すべからざる心をおこし、此の光が良心を常に照らして、道德秩序は自律的に無規定に行はるゝ此の神靈態、光りは神聖的制裁として無規定に道德行爲ならしむ。此の光りは神聖態を建設する契機なり。此の光り衆生の精神と神靈同化す。

道德指導の命令的性質あるを以て、彌陀威神靈の光と思ゆ。良心の裁判の所には正義と顯はれ、道德秩序の絕對根底は即ち絕對理性なる神靈態なり。然れば光明の本質は是れ絕對理性なり。

正義。ミダの智慧の勢能にして此光道德秩序を知らしむ。彌陀智慧の光りは、もとは絕對理性、神靈態なれども道德秩序を正ふする。之に障礙をなすときは、其正不正を雙べ照らして、其の不正の黑暗を破して正義の光を立つ。正義は公平無私なる內心の司法者にして、客觀的正義としては、彌陀の絕對理性の勢能即絕對佛智見を與へて正義ならしむ。正義は人の宗敎自己の良心にありて正不正を雙照して正知見を開かしめて正道に行かしむ。其實無僞なる理性態なり。

遇斯光とは、彌陀の恩寵と人の信仰との感合の狀態。知情意の三能に感合して此の三能を資す。彌陀の光は體一なるも人の心機が三能に頗て其の用を殊にす。恩寵と信仰とは、其體は異なるも其感合する機能は一にして、自己の精神に致一的にす。彌陀の光り即ち恩寵は一體なれども、之を領納せる機能によりて其の用を異にす。此の彌陀の恩寵と人の信仰との感合は、水月同交の關係にして、之を感ずる處の機能は人の

精神の内面に於てす。至心信樂と彌陀の慾望の精神が機能致一の狀態は、自己の心象實現すべきものなり。諦かに此が實現を證明する之を啓示と云ふ。即ち佛智見開示の義なり。

智力には啓示と實現し、心情には解脱となり、意志には靈化と現し來る。智力の啓示に三種あり。感覺的と寫象的と理想的となり。啓示とはミダ三昧に凝神し、彼のミダの實在が自己の精神に實現し來るとき、佛智見開發して其の實在を證明す。彼の實在を證明せんが爲に凝神し、先づ直觀に自己の意識に現し來るものは感覺的なり。先づ明相現するあり、或は錢の大の如し、或は鏡面の大の如し、或は瑠璃地内外映徹せるを見、或は白毫の光、或は寶像相好光明等。或は佛菩薩の大身を現し、虛空に徧滿し、或は丈六八尺等を觀見する等は、定中の意識の所觀なりと雖も悉く感覺的啓示とす。これ本法身法界に周徧す。故に念に隨つて映現す。一切處として相ならざるはなし、法身無相なるが故に、無相は相として相ならざるはなし、故に實現す。

次に寫象的啓示とは、既に妙色莊嚴を觀じ已らば、尙進んで彌陀の内證を觀ず。謂ゆる四智十力等なり、一切知慧と一切能との德と神聖態正義恩寵との屬性を以て彌陀の性德を顯はす。大智慧の光明普く法界精神界を徧照して、自然にして眞實に知らざるなく、見ざるなきを觀ず。

起信に謂ゆる不思議業相とは、智淨相に依るを以て能く一切の勝妙境界を作す。謂ゆる無量功德の相常に斷絶なく、衆生の根に隨て自然に相應し、種々に現じて利益を得せしむるが故にとは是なり。

一切能とは、起信に自然に不思議の業種々の用あり。即ち眞如と等しく、徧ねく一切處に徧し、又用相の得べき有ることなし、如來は唯法身智相の身、第一義諦、世諦あることなし、但衆生の見聞に益を得るに隨つて觀せしむる故に說て用となす。即ち法界の性にして所有萬物の無造作にして自ら作爲するを云ふ。

一切智とは、大智慧光明不起の義。徧照法界の義の故に、眞實識知の故に、心性見

を離る。神聖態はこの大智慧に觀ずる時は、絶對理性を觀ずれば、自己の良心を醒覺して道德秩序を發見し、神聖なる彌陀の聲を認識す。こゝに於て道德の根底は皆彌陀の光りなるを見る。ミダの神聖光に合ふ時は自ら侵すべからざる神聖態精神となる。

神靈態は勢力の智慧なり、是絶對理性にして神聖圓滿なる精神態光明なり。至精純一絶對にして此の光、人の個人の良心と現じて道德的行爲自律的になすことを觀ずべし。

正義とは、是れ智慧の用となる光にして、よく不正をさけて正義ならしむる光なりと觀ずべし。

恩寵とは、我等無明の罪惡に因て亡びたるものを、正知見の眼を與へて回復せしむるめぐみの光なりと觀ずべし。

三、法身觀とは、是れ彌陀の實體理性即ち法性法身なり。自性身は無始無終にして一切の相を離れ諸の戲論を離れ、周圓無際にして凝然常住なり。冥想的觀念絶對理想なりと觀ずべし。非空間非時間と同時に遍空間遍時間、永恒常然眞々如々の理性體なりと觀ずべし。此の光り能く衆生本性淸淨にして、同一根底にして彌陀の一分身たることを照知せしむ。

是の如く心機能的致一の彌陀の實在を觀念的に證明したるを啓示とも、亦三昧發得とも名づくるなり。

心情的解脱の光。此の光り人の心情信仰には解脱の德として顯はれ來る。人、天然に感情に脱却せざるべからざるの惡素質具有せり。爲に靈福を感ずる能はず。人の苦毒は本罪業に因る。罪過は煩惱より起す。煩惱は迷妄顚倒より、顚倒は無明より起る。無明は彌陀の法身に乖離するより出づ。其實體根底なる法身に乖きて無明となり、迷て顚倒し主我を執し、これより煩惱諸の惡業を作りて苦毒を受け、因果關聯して自ら解脱すること能はず。苦毒と罪惡との感情は、もと眞理にはあるべからざるものを自ら迷て苦と感ず。樂顚倒即ち主我幸福主義なり。人は天然としては本能の幸福を追ひ

求め、常に渇望して止むことなきも滿足の念なく、所謂、苦々、壞苦、行苦止むことなく、實に天然幸福主義の爲めには滿足を得べきものにあらず。

何故に斯く苦は、我が情に反して我を逼迫するやとならば、斯る苦毒は自己罪業因果の關聯として、また顚倒妄想より起る。我に非ざるを我と執し、苦の因をもて樂と迎へ、無常の規定の中に在て常住を求め、得べからざるものを得んと希望し、畢竟依屬に足らざる世界に依屬し、天然意向の眞理に反せるより、顚倒妄想を自ら苦毒を感ず。此煩惱罪業とが脫却せざるべからざるものなり。之を垢といふ。心情が垢によりて罪過と苦毒と顯し來るなり。此の不靈福の垢は、例へば粳米の糠糟あるが如く之を脫却するに非らざれば靈福を感ずる能はず。今彌陀の宗敎の見地より見れば、苦毒はもと彌陀に乖離し、自ら歸することを覺らず、自ら脫却せざるべからざる煩惱たることを識らず、之を覺醒し脫却すべき意志を歷起せんが爲めの豫報として感せしめられたり。身に老病死の苦毒なく、愛別怨憎の憂愁なき時は、心靈界を欣求する動機なし。煩惱と罪過との感情なければ靈德を欲望する期なし。苦毒と罪過の感情いよ〳〵熾なれば解脫の希求も隨つて深からん。苦毒と罪過とは心の垢穢より感ず。この垢穢を脫するに非ざれば靈福を感ずる由なし。之を脫却せんと欲せば自己本能の能くする處に非ず。たゞ彌陀の恩寵に依屬するの外に道なきを信じ、彌陀に依るの他に依屬に耐ふべき方なきを識るとき、初めて至心に歸命信賴の信仰おこる。自ら能はざる解脫を恩寵によつて脫却せんことを認識せば、たとへ生命を犧牲にしても救靈を乞はざるべからず。若し主我を執し煩惱の奴僕となり、又無常の爲に噉食せられ空しく黑暗の中に埋沒しなんこと必せり。如かじ身命を捨てゝも靈光の中に投じて彌陀の靈光と融合せんには。

汝等は是植物と動物の生活の外に、更に超絕したる聖靈の生活あるを知らず、いかでか、此の神光に感合せる妙遇を稱說して感知せしむることを得ん。珍膳未だ食せざるものその味を知らず、いかでか此の感合の妙遇をのべんや、植物は暖和の春の日に

爛漫たる麗色を呈し、馥郁たる妙香を發して、無意識ながらに天機感合の妙遇を顯はす。人は肉を有せる感情の高等動物なれば、窃窕たる淑女寤寐（思服の）夢の中に動物的生活の感合を見る。あないやし、何んぞ肉塊迷情の比例を以て神靈界の感合の妙境をのべんや。天無極を超越したる至眞至善至美の靈界神靈的感合の妙遇に例せば、豈土塊なる此の一惑星と無限の空間との比較も比とするに足らず。此の靈界に感合せんには、天然機制の我を亡じ、絕對的彌陀眞我の神靈界に投じ、眞實最深の我、即ち入我々入、彌陀眞我の外に我なし。水を海中に投ずるが如し、風中に棄を鼓するが如し。此の妙境に入るや五大皆空、言語道斷、八面玲瓏、歡天喜地。此境たる天然的心理を超越して、受想行識斷盡し、我亡し、洞然として心華爛漫として、馥郁たる香氣を發し、玄妙不可思議なり。一度この妙境に入り心機開發しぬれば、常に念に隨ひ意志によつて應現す。導師曰く定中に在て此日を見るとき、三昧定樂を得て身心內外融液して不可思議なりと。又曰く想心漸く微にして、覺念頓に除き正受と相應して三昧を證し、眞に彼の境の微妙の事を見る。何に因てか具さに說かんやと。

楞嚴に曰く、即ち佛心と交感し佛の氣分を禀ること、譬へば中陰の身が自ら父母を求むるが如く、陰信明通して如來の種に入り、道胎に遊んで親しく覺胤を奉ずとは、此の妙境界を洩されたり。

已に安立する心情は、肉は機制の束縛を免れざるも、靈は無碍光の中に在りて自在なり。肉は相對因果の約束に縛せらるゝも靈は絕對のミダに解脫して世の八風六塵に動搖せず、常に意志安靜なり。（以下斷絕）

念佛三昧を宗とす

宗趣。導師、念佛三昧を宗とす。

體の中心點、即ち主體の信と如來の心光と、合一する處。精神眞髓の奥に於て神秘融合す。

客體は全體にあらずして人の信心に直接交渉する對象の故に、之を淨土教には阿彌陀方便法身色相莊嚴智悲の表現。

宗教の中心眞髓は、此生佛一致、機法一體を實感し、即如來の啓示を被り、此一點の靈的感發は、不識的の眞理を初めて意識的に成り來りしなり。此靈感に依て、其知見開發し、眞の生命ある宗教意識を現じたるなり。此時心機一轉。

若し宗教的眞生命なるものが言語文字の權方便によつてならんか、宗教は他の教育知識にて宗教の書籍だにあらば足りぬべし。宗教は理論學說にて、其知識を以て眞髓ならば教育家に於て兼ぬることを得べし。然るに知識を與ふる教育家の外に宗教家の必要あるは眞の宗教は靈的生命として、人の精神中に傳播すべき靈物なればなり。故に眞實の宗教家は、此一大靈格なる如來の靈と永恒に連絡せる靈的光明の力あればなり。

昔善導大師の偉大なる感化は、此靈活生命の力あればなり。釋尊が、宗教の眞髓は學說理論の間に發見すべきに非ずと自覺し、入山學道せり。若し學術に於て得べくば王城に在つて天下の學者を聚めて研究すべし。

釋尊が伽耶に得道せる一種の靈感は、鹿苑には五比丘を感動し、世尊として、心光世を照す。導師、般若道場に三昧發得し、我證を以て世を知らせんと。空祖發得記に瑠璃地を見る等。宗教眞髓は靈的活力を自己に養ふにあり。自己に靈火燈され何人にも分つ。見よ釋尊の入山、導師の三昧、宗教家は此靈光を（　）得て之を傳播するを目的とす。說明は方便なり。

三　昧　正　受

あみだぶと心を西にうつせみの
もぬけはてたる聲ぞすゞしき

念佛三昧とは衆生心と佛心と融合聖交の心的狀態である。聲々連續して神を彌陀に投ず。念々專注して想を如來に凝す。已に久々に純熟する時は、入神妙境想像の及ばざる處言語の絕する處。觀經に韋提希夫人が我に思惟を敎へ玉へ我に正受を敎へ玉へと。疏に思惟とは是定前方便、彼國依正二報、四種莊嚴を思想憶念すること。正受とは前思想漸々微細覺想俱亡

又若得二定心三昧及口稱三昧者、心眼即開、見二彼淨土一切莊嚴一、說無窮盡也。

又言、三昧者即是念佛行人、心口稱念更無二雜念一、念々住レ心、聲々相續、心眼即開、得見彼佛、了然而現、即名爲レ定、亦名三昧一、正見佛時、亦見聖衆、及諸莊嚴一、故名二見佛淨土三昧增上緣一

三味入神の心相　七覺支

行者若憶念、若口稱、心々相續して專注する時は、如來の三味定力等が行者の心意に加はる故に、三味正受を得。其想念初は麁想にして漸々微細に入る。覺想已に止て三味に入る麁想より細念に入り、雜より正に爲る。覺想の順序を七覺支と爲す。

一、擇法覺支

擇法とは心意を一境に專注せしむる標目の處なり。口に佛を稱へ心に專ら彌陀を念ず若は總相若くは白毫相、若は相貌を取らず唯聲に就て佛心を念ず。何にしても初め專注統一する標相を定む。喩へば射を習ふ者は自己の矢ごろと目標の的との正鵠を契合する樣に集中す。要は意志の統一を爲すにあり。又催眠術を施す時、被術者が一の物を凝視して心意を集中する時は、亂想止み易きが故に、想念止りて術者の

心意と心力合一して三昧狀態に入る。念佛三昧の心的狀態も又然り。專ら彌陀妙色相好を念ずることは心一境に注せしめんが爲なり。然れども未だ三昧の修習なき時は神經動し想念甚だ注め難し常に擇法覺支の法に依て一ら彌陀を標目して心念を專注することを習ふ時は、久々にして純熟して經驗もつみて一境に入り易きに至る。

二、精進覺支

心一境に住して三昧を發得せんと欲せば勇猛精進に推勵せざる可らず至誠充實する時は自然に勇猛心が自發するものである。他動的に强いられたのでは効果揚らない眞實に愛慕の念增進して佛を見んと欲する時は心一境に住せんが爲、雜念を排除せん爲め、諸の障碍を脫せんが爲め自發的に精進力が奮發して、喩へば鑛垢を除去して純金を練り出す如く、諸の妄想雜起の鑛垢を排して至純精妙なる靈性が發揮す。

三、喜覺支

已に心も統一し雜想妄念も鎭靜、益微に入る時禪定の先前兆として身心歡喜を感ずること言語の及ばざる處、是定中の(自己靈性の)煥發より併發する處の喜悅にして陶々乎として二禪に入る感あり。

四、輕安覺支

三昧の先兆たる喜悅陶然として吾我亡じたる時、益々喜悅の心情も平和となりて、身心俱輕安を感ず。如來の慈光に融合し、無我の狀態に爲りて、身心あるを覺へず。アミダ佛と心を西に空蟬のもぬけたる心のすがた如來の中に我を投じて輕安を感ずること實に不可思議である。

五、定覺支

三昧正受の心的狀態。禪定の意彌微細に入りて、昧然として知を忘れ、即"諸緣一以成"鑒彌正境現前す。慧遠大師三昧の言を假りて云はば、斯定に入る者は昧然として知を忘れ所緣に即して以て鑒を成す。鑒明なる時は內に照し交映して而色像が生ず耳目の及ぶ所に非ず。而して聞見行はる。是に於て夫の淵凝虛鏡の體を觀る時は、

則ち靈相の湛一淸明を悟り、自然に玄音の叩くを察す心聽する時は塵累每に消へ、滯情融朗なり。天下の至妙に非れば孰か能く此に與からん。言ふ意は念佛三昧が彌々發得する時は、無想無我の狀態となり彌陀を念ずる心念が明鏡の如くに爲る。自己心鏡明なる時は內に照り交映して如來の黃金色の相が現はれる。其靈的現象は迚も肉眼にて見聞する比ではない。如來の靈相が自己の身體であるか、自己が如來の靈相となりしか聖凡融合の心的狀相は言思の及ぶ所でない。

六、捨覺支

已に三昧成就の上には任運無作意に佛心と相應して、我如來心中に在り、如來我に在りて、不可離の關係を成す。三昧未だ成熟せざる時は、專心の注意無き時は定心失ひ易し。然るに三昧已に純熟して久しき時は、敢て注意を要せず、自然任運に心定中に在りて失はず。喩へば射を學ぶ者初めには深き注意を用うれども已に純熟する時は任運に的中する如く、自己の純熟する處に是三昧入神の狀態である。

七、念覺支

已に三昧成就する時は自己の靈性が如來と合致し、如來心が自己と爲るが故に、心意已に更生したるなり。彌陀が自我の中心核となる。自己の眞體と爲る。故に心源より發動する心意なれば念々悉く佛心と相應す。八億の念は自然と如來の聖意が自己の心念と爲りて起る念とは人の心意に活動する處の働きである。然るに若し其人の人格中樞の核が佛心と純熟する時は、其中心の泉源より湧出る念々自然と佛心と相應す。三昧華開の時は次第に果實成熟す。果實熟する時は種子と爲る如く、三昧念佛は靈性成辨を目的とす。

三　昧　證　得

あみだ佛と申すばかりをつとめにて
淨土の莊嚴見るぞうれしき

三昧證得は必しも觀想にのみ限らず。若しくは觀念若くは口稱、何にしても一心徹底する時は必ず發得す。智解學識は或意味に於ては三昧の方便と爲ることあれども、三昧發得には寧ろ妨と爲つても智解を以て證得すべきものではない。

一心不亂の稱名還つて發得す。前の七覺支に於て三昧正受の心相の順序は已に明した。

行住坐臥、身口意業常與二定一合、唯萬事俱捨由如二失意聾盲痴人一者、此定必即易レ得、若不レ如レ是、三業隨レ緣轉、定想逐レ波飛、縱盡二千年壽一、法眼未二曾開一、若心得レ定時、或先有明相現、或可先見寶池等種々分明不思議者、有二種見、一者想見猶有知覺、故雖見淨境、未多明了、二者若內外覺滅、即入正受三昧所見淨境、即非想見、得爲比校、

群疑論、得三昧者何以得知得三昧頗有聖教能證知也、釋曰、但當憶想令心眼見、見此事者即見十方一切諸佛、以見諸佛故、名念佛三昧、此爲證行者平生雖種々修道、令入道場學此三昧、遂得見佛、若不得三昧寧得見耶、今能得見、即知、得三昧、言以見佛故、名念佛三昧、喩如人患目、不見衆色、大醫師能療眼、乃以金牌云々。

三昧發得記（全集六一二）

建久九年正月朔日、趣二山桃法橋敎慶之請一、歸庵之後未刻、正月一七箇日、恒例別時念佛始レ之、初日光明少現、第二日水想觀自然成就、又瑠璃地相少現、至第六日後夜、瑠璃地及宮殿相現、二月四日早晨、瑠璃地現、其相分明。同月七日、復瑠璃地現、凡上來種々相自二正月朔日一、至二二月七日一、卅七日之間現、顧我平生、課二念佛六萬遍一、不退勤修、由レ之今此等相現歟、二月廿五日目、出二如二赤裳一物一、又出二如二瑠璃壺一物一、前則閉レ目見レ之、開レ目即失、今即開閉俱見、同月二十八日、少有二病惱一、山暫減二念佛一、或一萬遍或二萬遍、隨意勤修其後右眼有二白光一現光端青色、又出二瑠璃光一、其貌如レ壺內有二紅花一、狀如二寶瓶一、又日沒後出望二四方一、各方有二赤青色寶樹一、高下無レ準、或四五丈或二三十丈、其相宛如二經中所說一、九月二十二日早晨、又瑠璃地現、周圍可二七八步一、朗然映徹、乃至、建仁元年二月八日後夜開二極樂衆鳥幷答笛等音一、其後日間二種々音聲一、同二年正月五日、佛殿勢至菩薩像後、即彼菩薩丈六許頭面三度現、又彼菩薩丈六許眞身現、乃至同十二月二十八日午時、高畠少將來訪謁二於佛殿一、法話之間念佛如レ常、阿彌陀佛形像之後、即彼佛丈六許頭面、透二徹障楮一而現、少時而沒、元久三年正月朔日、勤二修恒例七日念佛一、至第四日、念佛之間、阿彌陀佛觀音勢至三尊、共現大身、五日亦現、

上人常の居所をあからさまに立出で歸り玉ひければ、阿彌陀の三尊、繪像にも木像にもあらずして、垣を離れて板つきにもつかず、天井にもつかず、現じ玉ふ、無量壽佛化身無數、與觀世音大勢至、常來至此行人之所の文もいよ〳〵たのみふかきもの也

廬山遠師、諸三昧共名甚衆、功高易進念佛爲先、窮レ玄極レ寂如來尊號、神體合レ變、應レ不二以方一、故今入二斯定一者、味然忘レ知、即二所緣一以成レ鑒、明則內照交映、而色象生焉、非二耳目之所一、暨、而開見行焉、於レ是都二夫潤凝虛鏡之體一、則悟二靈相湛一清明一、自然察二玄音之叩一、心聽則、塵累每消、滯情融朗、非二天下之至妙一、孰能與二於此一、

三昧功果實質

あみだ佛に染むる心の色に出では
秋の梢のたぐひならまし

三昧功果の實質は行者の精神狀態を靈化す。三昧とは生佛融合。融合する時は如來大願業力の增上緣に依つて淨化せらる。本衆生の心、染汚無智罪惡苦毒こそ凡夫の地體なり。眞實に自己の非靈態なるを信認するは、如來大願力を歸命信賴するの動機なり。

一心に念佛三昧に入る時は、衆生の垢質は如何に深重なるも、彌陀の光明の前には敵すること能はずしら靈化せらる。宗祖未だ念佛三昧に入らぬ已前、佛學研究の時代は華嚴開經の日には普賢因圓の理に、重々無盡の華藏に遊び、法華披覽の朝には（ ）

已に三味功成じ、心神融合し靈化の狀、彌陀同化の神靈體不可思議凡愚の測思覬する處に非ず。今管見を以て測量すると、三味の心狀は、生佛不二、佛心衆生心に薫染し、凡心還て佛心と同化す。喩へば藍汁は白布とは本別なれども、屢々染むる時は、藍汁が白布を藍色に染る如く、靈妙なる佛心衆生心に薫染する。即ち衆生心化して佛心と爲る。然るに衆生心本一體、働の上に暫らく四相に分類す。

感覺と感情、知力、意志、是なり。四類の上に如來に融合美化せられたる心相を明さば、

如來
- 清淨光——清淨美化——感覺——染垢塵汚
- 歡喜光——融合美化——感情——煩惱苦惱
- 智慧光——知見悟入——智力——無智迷妄
- 不斷光——靈化——意志——弱志罪惡

衆生

衆生

國土

清淨。肉——眼、耳、鼻、舌、身、意　　人類所感

天——眼、耳、鼻、舌、身、意　　天類所見

法——眼、耳、鼻、舌、身、意

慧——眼、耳、鼻、舌、身、意

佛——眼、耳、鼻、舌、身、意　　淨土唯佛（　）居淨土

歡喜

肉體歡樂——人

樂天　——天

寂靜無爲——二乘

他受用法樂——菩薩

自受用法樂——佛陀

智慧

科學的學藝——人乘

天才（　）知——天乘

眞空實智——二乘

權實二智——菩薩乘

一切種智——佛乘

不斷

人道的道德

天道的道德

二乘的道德

菩薩道的道德

佛道的道德

念佛三味三緣

如來の三緣と衆生の三心

月影の到らぬ里は無けれども
　眺むる人の心にぞすむ

觀經に、如來八萬の相好より、光明遍く十方世界を照して、念佛の衆生を攝取して捨て玉はずと。

如來無緣慈の光明と念佛衆生の信念との關係

本來如來の光明遍照法界、實に遠近親疎なし。然れども衆生無明罪惡の覆ふ處、自ら接觸すること能はず。

但念佛のみありて光攝を被むる。光に觸るゝものは益を得ざるなし

善導大師三緣を以て生佛の因緣を釋す。

近緣
- 智
  - 大圓鏡智——觀念（アラヤ）
  - 平等性智——理性（末那）
- 慧
  - 妙觀察智——認識（意識）
  - 成所作智——感覺（前五識）

衆生

親緣
- 身輪（如來相好は無上慈悲を現せし表情）
- 語輪（稱我名號の願は親愛の表語）
- 意輪（無緣慈悲常恒衆生を念ずるの慈愛）

三密相應 — 身 口 意

增上緣
- 神聖（正義）——父
- 恩寵——母

本

五種增上緣

一、滅罪——觀經下品五十億劫生死罪（現生滅罪）

二、護念——現生護念——
- 十二觀、三尊來此行人之處。二菩薩常行人作勝友知識、念佛衆生攝取不捨隨逐。
- 十往生經、廿五菩薩日夜安穩得。
- 小經—六方護念。較舟經—天龍八部。延年轉壽長命安穩。

三、見佛增上緣
- 如來三力外加
  - 一、大誓願力
  - 二、三昧定力
  - 三、本功德力
- 觀經
- 般舟三昧經
- 月燈三昧經
- 文殊般舟

四、攝生增上緣
- 大經——十八願
- 同——得生無量壽佛國者皆乘彌陀大願業力

五、證生增上緣

昭和三年六月廿八日印刷
同　三十日發行
誌代年七冊壹圓貳拾錢（郵稅共）
年拾貳冊　貳圓（郵稅共）
編輯兼發行人　山崎辨成
東京市小石川區茗荷谷町九八
印刷人　小林七太郎
電話小石川一四九五
東京市小石川區水道端二ノ四四
發行所　ミオヤのひかり社
振替東京六六八五一番